

ICTを効果的に活用した授業づくり

～一人一人に応じた主体的・対話的な学びの深化を目指して～

千葉県立船橋特別支援学校 電話 047-439-5811
FAX 047-438-9948



研究のポイント

本校児童にとっての「主体的・対話的で深い学び」について定義し、児童がどのように学んだかという視点から、本校の実践についての成果や課題をまとめた。実践を整理していく中で、主体的・対話的な学びの深化につながるICTの効果的な活用方法について検討した。

■学校の概要

<https://cms1.chiba-c.ed.jp/chibapref-funabashi-sh/>

本校は、昭和53年に開校した、肢体不自由のある子どもたちのための県立特別支援学校で、今年度は、創立43周年を迎えた。学区は「船橋市・市川市・浦安市・習志野市・八千代市」の5市が基本となる。

開校時から、平成26年度までは、小学部、中学部、高等部の児童生徒を教育する学校であったが、平成27年4月の県立船橋夏見特別支援学校開校に伴い、小学部だけの学校として再スタートを切った。

本校の強みの一つに、「地域支援活動」がある。その一環として、現在、肢体不自由（からだ）・聴覚障害（きこえ）・視覚障害（見え方）の3障害種にわたって、地域の小・中学生を対象に「通級による指導」を展開している。

■研究課題

ICTを活用した授業実践について本校児童の主体的・対話的で深い学びの視点に沿って整理するとともに、多様な教育課程における効果的なICT機器の活用方法や授業実践の在り方についての研究を行う。

■研究の目的と方法

【目的】

- ・児童がどのように学んだのかという視点から、主体的・対話的な学びの深化につながるICTの効果的な活用方法を明らかにする。

【方法】

- ・ICTを活用した実践について教育課程ごとに、児童がどのように学んだのかという視点で整理する。
- ・実践について、本校児童が主体的・対話的な学びを深めることができたかという視点に沿って、成果と課題をまとめる。
- ・外部講師を招いた全校研修会を行い、全職員で「ICTを活用した主体的・対話的で深い学び」の具体的実践について知り、授業改善に生かしていく。

■研究概要

【実践について】

本校児童の主体的・対話的で深い学びを次の3つに整理した。「自分で選んだり、自分の考えを表現したりして、自分から活動に参加すること」「友達や先生と一緒に考えて、考えを深めること」「深まった考えを、次の活動や別の活動に発展させること」である。具体的実践は次の通りである。

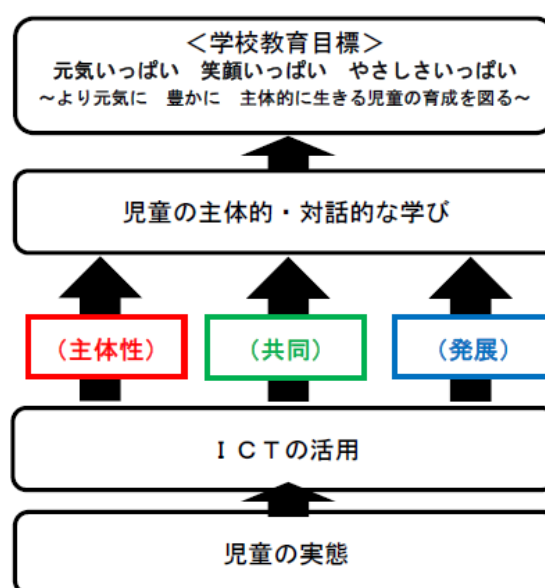
- ・本校ホームページやQRコードを活用した、長期休業中の学習支援
- ・音声入力アプリを活用したプログラミング教育
- ・iPadやタブレット端末のアプリやBTスピーカーの活用
- ・パソコン、プロジェクターの活用
- ・スイッチ教材、iPadタッチャーの活用
- ・拡大鏡、UDブラウザの活用

【成果】

- ・日頃から繰り返しICT機器の操作をしたり、興味関心のある題材をICT機器と関連させたりすることで自分から意欲的に学習できる。(主体性)
- ・ICT機器を使って課題解決のために、友達や教師と話し合ったり、ICT機器を使った遊びを一緒に行ったりすることで、共同で考え、新たな考えを知ったり、活動が分かりやすくなったりする。(共同)
- ・ICT機器を使うことで、児童が別の活動に興味をもったり、日常生活の中でできることが増えたりするなど、活動が広がる。(発展)

【次年度に向けて】

- ・児童一人一人に合ったICT機器を引き続き使用していくとともに、児童が自分から取り組める手立てを講じ、児童の主体的な活動を支援していく。(主体性)
- ・ICT機器を友達や教師との共同活動や様々な学校生活場面、家庭での生活の中に進んで取り入れていく。(共同)
- ・ICT機器を、自分の考えを次の活動に生かす、別の活動に発展させるなどの活動に組み込み、深い学びにつなげていく。(発展)



関連資料

- ・次期学習指導要領に向けたこれまでの審議のまとめ 補足資料
文部科学省ホームページ

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/gaiyou/1377051.htm

【講評】

船橋特別支援学校の実践について

今年度の研究は、I C T機器の効果的な活用方法を明らかにするという目的を持ち、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて実践を行っていただきました。

昨年度に引き続き、I C T機器の活用について、準ずる教育課程、知的代替の教育課程、自立活動を主とする教育課程、そして視覚障害の通級による指導における実践例を示していただきました。音声入力アプリを活用したプログラミング教育、スイッチ教材、i p a dタッチャーやプロジェクターなど、I C T機器の活用が、児童の意欲的な学習をより充実させていることがわかりました。

今後さらに、児童一人一人に合ったI C T機器の活用を充実させること、職員のI C T機器の活用実践が深まっていくことを期待しています。